
眠りの海でうたうひと

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠りの海でうたうひと

【Nコード】

N6700G

【作者名】

久芳

【あらすじ】

旅人・トオマは、宿で目を覚ます。彼は眠りの海を渡るために、海のそばで宿を営む魔女・アナの仕事を手伝っていた。渡るうとするものは永遠の眠りにつくといわれる海の秘密を、アナは知っていた。

まるで誰かに優しく揺り起こされるような、そんな穏やかな目覚めだった。

シーツの上で軽く身じろぎして、トオマは身体を起こす。少し古びたベッドは、体重の変化に合わせて、スプリングが鈍くきしんだ。頭の中で、誰かの声が響いている。歌が聞こえる。それが何の歌なのか、どこの国の言葉かですらわからないうちに、声は耳から抜けて消えていってしまった。

まぶたをこすってあたりを見回し、トオマはここが宿の部屋だと気づく。そういえば昨晩は、長い野宿に疲れていたので宿をとったのだった。

小さな宿だったけど、中身は申し分ない。天井にも壁にも傷や虫食いはなく、床もよく磨かれている。部屋全体に掃除の手が行き届いており、シーツは綺麗に洗濯してあるし、布団も太陽に干されてふかふかだった。

以前も似たような宿に泊まった記憶があるけれど、いくつもの宿を渡り歩いたせいで、それがどこの町だったかまでは思い出せない。手早く身支度を整え、トオマは部屋を出る。お腹が空いていた。そういえば最近、ろくなものを食べていなかった。

部屋の扉を開けるなり、焼きたてのパンの香りに腹の虫が鳴る。甘いジャムと紅茶と、かすかな潮の香りが鼻腔をくすぐった。

潮？ トオマは首を傾げる。たしか自分は、海とは程遠い森の中を歩いていなかっただろうか。潮の香りなんてするわけがない。けれどその香りは、階段を降りれば降りるほど強くなってゆく。

自分はどこに向かつて旅をしていたのだろう。考えて、トオマは食堂にはいると同時に思い出した。

「……眠りの海だ」

その呟きに気づいて、宿の女将は高く結い上げた髪を揺らしてふりかえる。まだ若く、蒼の瞳が印象的な彼女は、トオマを見てほころぶように笑った。

「おはよう、旅人さん。お腹すいてるでしょう？ 朝ご飯どうぞ」

いくつもの森を越えた先にある、この小さな宿。それは眠りの海のそばにあり、多くの旅人を雨風からしのぎ、癒しを与える、憩いの場所だった。

「昨日はよく眠れた？」

食後の紅茶とともに、女将がそう、声をかけてきた。

アナという名の彼女は、女性と呼ぶにはまだ若く、あどけなさの残る顔立ちをしている。けれどこの宿に、他の働き手は一切いなく、彼女が一人ですべてをこなしているのだった。

「夜、すこしにぎやかだったから、旅人さん眠れないんじゃないかって心配してたの」

「そうなのか？ 全然気づかなかった……」

甘いミルクティーをすすりながら、トオマは食堂を見渡してみる。にぎやかだったというわりには、朝食をとる人の姿が少ない。みんなまだ、部屋で眠っているのだろうか。

「あ、おはようございます。朝食できてますけど、食べられますか？」

二階の部屋から降りてくる客人たちに、アナは必ず、笑顔で声をかけた。この宿にはすでに何日もお世話になっているけど、彼女は毎朝必ず、笑顔で客人に挨拶をするのだ。

そんな彼女が魔女だと言われても、たいていの人はすぐに信じる

ことができない。トオマもその一人だった。

彼女は普段、ほとんど魔法を使わないのだ。客人が間違ってコップを割っても、沸騰した鍋が吹きこぼれそうでも、必ず自分の手を使って片付け、火を消している。部屋の奥で不思議な薬を調合しているわけでもなく、ごくごく普通の人として生活をしていた。

けれどアナは間違いなく魔女であり、毎日魔法を使っている。トオマは最初、それが魔法とは知らずにいたけれど、一緒にいるうちに自然とわかるようになった。

「旅人さん。それ終わったら、薪割りお願いしてもいいかな？」

そしてトオマは、彼女の宿で、少しばかり働かせてもらっていた。

眠りの海。それはトオマが幼いころ教えられた神話のように、現実味のない不思議な海だった。

深い山奥にある、大きな湖。そこは広く、深く、そして危うくて、渡ろうとする者はみな永遠の眠りにつく。命をおとすことから、『眠りの海』と呼ばれている。

海のある周りの地域は、長年続く戦のせいで、そのほとんどが荒れ果ててしまっていた。そのため、戦から逃れようとする人々は、安全だと言われている海の向こう側に行くことを望むことが多い。トオマもその一人で、運悪く巻き込まれてしまった戦に、旅の行く手を阻まれてしまっていた。

そして耳にしたのが、この宿と、そこに住むアナという魔女だった。

彼女は唯一、湖を眠らぬまま渡りきることのできる人だと言われている。

ことの事情を説明し、湖を渡りたい旨を伝えると、魔女はあっさりとしてそれを受け入れてくれた。数日間、この宿で働くこと。それが湖を渡らせてもらう条件だった。

「今日で……何日目だったかな」

宿の裏手で斧を振りかざしながら、トオマは呟いた。

トオマの主な仕事は、掃除洗濯、薪割りといった、いわゆる雑用一般だった。それからアナの細腕には大変な、重いものの運搬。彼女はトオマから宿代をとらなかった。

数日と言われていたはずなのに、とうに十日はすぎた生活で、トオマもこの生活に慣れつつあった。もともと戦の火から逃れるためにここにやってきたのだから、宿の穏やかさはとても心地よい。アナとの生活も悪くないし、精のつくものをたくさん食べたおかげで、

体力も十分に回復していた。

「この宿は本当に、平和なんだな……」

眠りの海は、森の深くに位置するため、戦の火は届かない。土地も豊かで、食糧のほとんどは自分で育てたものだった。

最後の薪を割り終え、トオマは額の汗をぬぐう。ほつと息をつき、胸いっぱい潮の香りを吸い込んだ。

そして、歌声に気づいた。

「アナだ……」

トオマはすぐに、それと気づく。積んだ薪を蹴散らさないよう足元に気をつけながら、声のほうへと足を運んだ。

静寂な森に囲まれた空気の中で、声だけが、どこまでも響いている。さほど大きな声で歌っているわけでもないのに、その澄んだ声はトオマの耳に届き、自分の居場所を知らせていた。

アナは、宿の入り口にある階段に、ちよこんと座っていた。

ただ座っているのではなく、食事の仕度をしながらだった。かごに入ったジャガイモを、慣れた手つきで皮むきしている。どうやら昨日、トオマが掘り起こしたものらしい。

手のひらほどのナイフを巧みに動かし、彼女は次から次へと皮をむいていく。手は決して休めず、そして唇も歌をつむぎ続けていた。トオマの知らない国の言葉。彼女はそれを、いつもうたっている。おかげでトオマもメロディは覚えたものの、言葉もその意味も理解できぬまま。

この歌こそが、彼女の使う魔法だった。

荒れ狂う眠りの海を落ち着かせるための、鎮めの歌。彼女が毎日歌い続けるから、海はいつも穏やかにさざ波を立てているらしい。トオマに歌の効果はよくわからないけれど、いつもこの歌を聞くと心が洗われる気がした。

「……あ、終わった？」

もっ少し聴いていたいと思ったけれど、アナはトオマに気づき、歌をやめてしまった。

畑で採ったばかりのトマトをひとつ手渡し、「ごくろつさまと声をかけてくれる。彼女もちょうど終わりだったようで、最後のひとつをむき、かごに入れて立ち上がった。

「やっぱり男の人がいると助かるわ。これでしばらく、薪割りも必要ないし」

一見おとなしそうに見えて、その薔薇色の唇はよく動く。はつらつとした彼女のことは、一目会ってすぐに気に入った。

「ごめんね、雑用ばかり頼んじゃって」

「いや、海を渡れるならお安い御用さ」

まだすこし泥のついたトマトを服でぬぐい、トオマはかぶりつく。ぴんとはった皮がはじけ、口の中にみずみずしい甘さが広がる。おいしいと笑ったトオマを見て、アナはこころなしか、瞳を翳らせた。「海を渡るの、もうちょっと待ってもらってもいい？」

「いいよ、どうせ急がないから」

働いてみてよくわかるけれど、宿はなかなか忙しいようだ。そんな中時間を割いて、人を連れて海を渡るのは骨が折れるだろう。彼女はそうとうな力を秘めた魔女ではあるけれど、それ以前にまずはこの宿の女将なのだ。

「この宿は、不思議だな」

「不思議？」

トオマの発言こそが不思議そうに、アナが首をかしげた。

宿泊客はたしかに多いはずで、ひっきりなしに人々が宿を訪ねてくる。けれどその人たちと宿で顔を合わせるはその日の夕方だけで、次の日の朝にはもういなくなってしまう。また一方では、前の晩はいなかったはずの客が、朝食をとっていることもある。自分が寝ている間に客の出入りがあるのだとしたら、はたしてアナはいつ眠っているのだろう。

トオマがそれを口にする、彼女はあっさり、「気づいてたの？」と言った。

「なんだ、気づいてたなら話は早いね。今日は人が多いから、旅人さんに手伝ってもらいたかったの」

「手伝う？」

「お昼ご飯の前にやっちゃおうか」

アナに手を引かれて、トオマはわけがわからぬまま、その後を続いた。

向かう先は、眠りの海だった。

アナはまず、トオマに自分のと同じ、ワイン色のローブを渡した。彼女曰く、「眠ってもすぐに見つけられるように」とのことらしい。ローブはまるで、トオマのために仕立てたかのように、身体にぴったりとあっていた。

「旅人さん、この海を近くで見るのははじめてでしょう？」

眠りの海、眠りの海と、湖をまるで本物の海のように呼んでいた

人々。最初は不思議に思っていたトオマも、実際に見た光景には、思わず言葉を失ってしまった。

眼前に広がるのはまさしく、海、だった。

湖畔には白い砂浜が広がり、風に流されたさざ波がゆるやかな音を奏でている。空は高く、水の透明度も高い。海のように見えるのは、対岸がかすんで見えるほど広い湖だからで、深みに広がる珊瑚礁と、湖を鬱蒼と囲む木々には、すこしだけ違和感があった。

見渡す先、ずっと。むかし絵本で見たような、常夏の海が広がっている。

「本当に、海みたいでしょう」

立ち尽くすトオマを見て笑い、アナは靴を脱ぎ捨て、湖　海をわたりはじめる。手招きされて、トオマもあわてて彼女に続いた。

彼女が一緒だからだろうか。身体が沈むことなく水面を歩くことに、驚きはなかった。手はアナとしっかりつなぎ、まるで子供のように、彼女に先導されて続く。

「今日は、真ん中のほうまで行くからね」

その言葉通り、彼女はどんどん足をすすめてゆく。風が引き起こす波が、足元を揺らす。時折波の高いところがあつて、その白いしぶきがローブを濡らした。

「……アナ？」

囁きが聞こえたような気がして、トオマは呼びかけてみる。けれど彼女から返事はなく、ただ振り向いて笑うだけだった。

彼女はうたっていた。

唇を微笑みの形に変えて、耳元をさらう風に声を乗せるように。

穏やかで、歌というよりはまるで楽器を奏でているような、言葉がわからなくてもすんなり耳に届く声。トオマは『古の魔術師の言葉なの』とアナが言っていたのを思い出した。

その歌を、彼女は何度も何度も、繰り返しうたっている。この眠りの海を渡るにも、この歌は必要らしい。

古の言葉は、なんと言っているのだろう。トオマは考えながら、

足元の珊瑚礁を見下ろす。あいかわらず身体は湖面を歩き続け、沈む気配はない。まるで薄いガラスの上に乗っているようで、つま先が触れると水面にまるい波紋がどこまでも広がってゆく。

その下には珊瑚礁が広がっているけれど、魚などの生き物の姿はない。湖はずっと浅いままで、もし今湖に落ちてしまったとしても、トオマの身長なら十分足の届く深さだった。

なんて澄んだ海なんだろう。なんて白い珊瑚なんだろう。トオマは足元に目を奪われる。その水面が不自然に波立ったのに気づいて、アナがうたうのをやめた。

トオマは湖の変化にも気づいたものの、気にせず湖底を見つめ続けていた。珊瑚の枝が、まるで人の手のように見える。あの岩はなぜだろう、人の顔に見えた。

「人が、寝てる……？」

トオマの眩きが漏れるよりも早く。人の顔をした岩はかっと目を見開き、手の形をした珊瑚がトオマめがけて腕をのばしてきた。

はっと我に返ればもう遅い。

「うわっ！」

湖に響き渡っていた歌の余韻がぶつりと途切れ、トオマの足が湖に沈む。バランスを崩してよろけたところを、珊瑚にしかとつかまれ、そのまま引きずり込まれてしまった。

突然の出来事に頭がついていかないトオマは、自分にしがみついてくる珊瑚が人であることを確信する。指はもとより髪の手先まで、珊瑚のように白く石化しているけど、自分の肩をつかむ腕の力はたしかに人のものだ。トオマとさほど変わらない、若い男性のため、引き剥がすのにもそうとう力が必要だった。

水の中で暴れると、口から息が漏れてしまう。湖底の砂が舞い上がり、視界がにごる。いったいアナはなにをしているのだろうと思っっている暇もなく、トオマは必死に、すがり付いてくるようにも思える男性をなだめた。

「くそっ」

どうにかこうにか男性の動きを封じ、トオマは湖から顔を出す。

いくぶん水を飲んでいたけど、頭ははつきりしていた。

「アナっ！」

どうということだ、と問いただそうとして、トオマは腕の中の男性が静かになったことに気づいた。

湖の中ではあれほど元気だった男性は、空気に触れるなり、気を失ってしまったようだ。白い石だった身体は空気に触れたところからやわらかくなり、見る間にトオマたちと同じ姿に戻ってゆく。

珊瑚であつたのは、栗色の髪を短く切りそろえた、利発そうな青年だった。

突然の変化に戸惑いつつも、トオマはアナの姿を探す。彼女はトオマのすぐ鼻の先でしゃがみこみ、湖の中に手をのばしていた。

トオマと違い、湖面に両の足で立ち続ける彼女は、腕とローブを濡らしながら、湖から珊瑚の塊を引き上げる。それはトオマが抱える青年と同じく、人の姿をした白い石で、引き上げられるとすぐに、金色の髪がたわなにうねる少女へと変わった。

「旅人さん。その人、連れて帰るからね」

「……は？」

その人とは、トオマが抱える青年のことだ。なぜ自分に襲いかかってきた人を運ばなければならぬのかと思っただけ、アナは少女を背負うだけで精一杯のようだった。

「約束してたの。この子たちを目覚めさせるって。ふたりいつぺんに連れて帰るのは大変だから、旅人さんがいてくれて助かったわ」

よいしょ、と一声あげて少女を背負いあげたアナは、呆然とするトオマを尻目にすたすたと歩き出す。

納得がいかに立ち尽くすトオマを見て、彼女はおいでと手招いた。

「眠りの海って呼ばれるのは、こうして人がたくさん眠ってるからでもあるのよ。とりあえず宿に戻らないと。話はその後だね」

結局宿に戻っても、湖から引き上げたふたりを着替えさせたりと仕事があり、一息ついたのはふたりをベッドに寝かせてからだだった。「ふたりとも、まだ起きない？」

規則正しい寝息をたてるふたりを見守っていたトオマに、アナが紅茶を差し出してくる。それを受け取ったトオマも、着替えはしたものの、海に落ちたせいで身体が冷えていた。

「長い間眠っていると、目覚めるのに時間がかかるのよね」

アナはトオマの隣に椅子を運び、座った。ぼんやりと紅茶を飲み、つい今しがたまで湖の底にいたはずの人たちを見つめている。

「……これがね、あたしの本当の仕事なの」

しばらくして、彼女は口を開いた。

「あの湖にはね、他にもたくさんの人が眠っているの。湖を渡ろうとしたら、振動とか気配とかで眠っている人たちが起きて、さっきの旅人さんみたいに、湖に引き込まれてしまう。だから、渡れないって言われてるの」

ちらと眺めたアナの横顔は、まぶたを伏せて、どう説明しようか思案しているようだった。長いまつ毛がかすかに震えながら、白い

頬に影を落としていた。

「あの湖で眠っても、死んだわけじゃないの。目覚めればまた元通りになるわ。だからよく、眠らせてくださいって人が来るわけ」

「アナは、その管理をしてるのか？」

「そうよ。毎日あややって歌をうたって魔法をかけないと、眠ってる人たちが勝手に起きたりすることもあるから」

うたっているにも、目覚めてしまう。それが先ほどの、錯乱状態に陥った青年だった。

「あたしはこの宿に来たお客さんと、眠ってから何年後に起こしますっていう約束をするの。目覚められなくなる可能性もあるってことも、ちゃんと言っわ。このふたりは恋人同士で、来たのがあまりにも生きづらい世の中だったから、戦が終わったら起こしてくださいって言うてきたのよ」

だから、今日目覚めさせたの。彼女のその言葉を引き継ぐように、青年が寝息とともに何事か呟いた。

「……起きた」

アナが立ち上がり、青年のベッドへと近づく。何度かかすかなまばたきを繰り返した後、彼は寝ぼけながらも目を覚ました。

「おはようございます。よく眠れました?」

青年は、しばらくきょとんと、アナの顔を眺めていた。まだ頭が完全に覚醒していないようで、しきりに周囲を見回しては、自分が今どこにいるのか思い出そうとしている。

「……レイチエル」

そしてそう呟き、アナを抱きしめた。

「違う。レイチエルはあたしじゃないわよ」

アナは突然の抱擁に驚きもせず、なれたように青年から身体を離す。そしていまだに眠り続ける少女を指差し、彼女こそがレイチエルだと教えた。

「約束どおり、戦が終わったので起こしましたよ。もう、安心して暮らせますからね」

けれど青年の耳に、その言葉は届かない。ベッドから飛び起きた彼は、少女の身体を抱き起こして、その唇に深い口付けをしたのだ。眠り姫、レイチエルも、その口づけでようやく目を覚ましたのだ。つた。

「あのふたりは……どれくらい眠ってたんだ?」

長い眠りについていたにも関わらず、ふたりは目覚めると、すぐに宿を去っていった。

「どれくらいだろ? まあ、軽く千年ぐらいはたってるけどね」

あっけらかんとしたアナの口調に、トオマは思わず聞き流しそうになる。

「千年?」

「そうよ。戦が終わってすぐっていつても、生活のしづらさはしばらく続くでしょ? だから終わっても様子見てたの。そうしてるうちに、あのふたりも古株になってたのよね」

ふたりの姿を見送り、アナは宿に戻る。めずらしく宿に他の客はなく、トオマとアナのふたりきりだった。

彼女はトオマが眠りの海の真実を知るまで、夜に客人たちを眠らせ、起こしていたらしい。だからトオマが気づかぬうちに、宿の顔ぶれが変わっていたのだ。

「眠っている人の管理とかは、なんか紙とかに書いてたりするのか？」

「いいえ、全部あたしの頭の中よ」

「じゃあ、代々情報を引き継いで？」

「……引き継ぎ？」

トオマの言葉にきょとんとして、アナは、ああそうかと笑った。

「あたし、不老不死なの。だからこの湖の管理は、今までもこれからも、あたしがずっとやっていくのよ。永遠にね」

彼女は軽い口調で言いながら、洗濯物を取り込みに行こうと、トオマに背を向けた。

「さっきのあの子たちも、最初は時代の変化に戸惑うと思うけど、駆け落ちに反対する家族ももういないからね。のびのび暮らせるんじゃないかな？」

「アナ……」

その切なげな横顔に、トオマは思わず、彼女の手をつかんで引き止めていた。

「なあに？」

トオマ？ と呼ぶ唇に、自分の唇を重ねる。

とたんに、強いめまいが襲った。

アナは、もう戦は終わったと言っていた。

ではなぜ自分は、今も戦から逃げ続けているのだろうか

そこで、トオマの意識は途切れた。

まるで誰かに優しく揺り起こされるような、そんな穏やかな目覚めだった。

シーツの上で軽く身じろぎして、トオマは身体を起こす。少し古びたベッドは、体重の変化に合わせて、スプリングが鈍くきしんだ。頭の中で、誰かの声が響いている。歌が聞こえる。それが何の歌なのか、どこの国の言葉かですらわからないうちに、声は耳から抜けて消えていってしまった。

「あ、起きた？」

アナの声に、トオマの朦朧としていた意識が、ようやく覚醒した。「のどかわいてるでしょ。水、飲む？」

「……飲む」

声が枯れて、うまく喋れない。額から伝う汗の量が多く、どうりでのが渴くはずだと思った。アナから受け取った水はすぐに飲み干し、空になったコップに彼女はもう一度水を注いでくれた。

トオマがほっと息をついたのは、三杯の水を飲み干した後だった。「俺……どれぐらい寝てたんだ？」

「ほんの数時間よ。旅人さん、重いよね。運ぶの大変だったわ」「そうじゃない」

トオマのはつきりとした口調に、アナはいつもの微笑みを消した。その大きな瞳で探るようにトオマを見つめ、彼女はそっと息を吐き出す。そしてその長い指を折って、ひとつふたつと数えだした。

「だいたい、五十年ぐらい、かな」

「今回は早かったな」

「どうしても、トオマに会いたくなっちゃって……」

唇をくっとかみ締めたかと思うと、彼女は視線から逃れるように、顔を伏せてしまった。

end

「もう、やめよう、トオマ」

絞り出すような声で、アナは言った。

それだけで精一杯のようで、あとは何も言わなくなる。まばたきをこらえて何とか涙をこぼすまいとしているけど、目のふちにたまった涙がこぼれ落ちるのは時間の問題だった。

「アナ……」

震えるその細い肩を、トオマはそっと抱きしめる。彼女は抵抗せず、そのままおとなしく身体を預けていた。

彼女を抱きしめるのは、五十年ぶりになるらしい。けれどトオマの記憶では、彼女とはいつも、抱き合っただけだった。

トオマは目覚めたとき、必ずアナと触れ合っている。

もう何度繰り返したかわからない、海での眠りと目覚め。それはトオマが唯一、アナと生き続けるための方法だった。

「もう、だめだよ。これ以上眠ったら、トオマ、起きられなくなっちゃう……」

こらえきれずに、アナが涙をこぼす。だまって肩に顔をうずめさせ、トオマはその長い髪を指にからめた。彼女からはいつも、太陽と潮の香りがした。

「少しずつ、眠る前のこと、思い出せなくなってきてるでしょう？ 記憶が、はじめてここに来たときのものになっていったでしょう？ 本当は今回のトオマ、目を覚ますのに、とても時間がかかったのよ」

自分は眠りの海で、アナとともに生きる。そう約束したのは、いったいいつだったろう。山を黒く焦がしたあの戦も、もう遠い昔のことなのだ。

「あの海もね、珊瑚に同化しすぎて、起きられなくなることがあるの。このまま繰り返してたら、トオマ、起きられなくなっちゃう」

一度あふれた涙は止められないようで、アナは泣きじやくりながら、トオマを抱きしめた。何度目覚めても、彼女の姿は変わらない。対して自分は、少しずつながらも年をとっていた。

どんなに海で眠ろうとも。目覚めている時の間だけ、トオマは年をとる。アナと違って、不老不死にはなれない。だからできる限り海で眠り、百年に数日だけ目覚めて、彼女と触れ合うことが、アナと交わした約束だった。

「いいんだ、アナ。俺は、アナと一緒に、この海にいるって決めたんだ」

彼女はなぜ、自分が湖の管理をする事になったのか、決して話さない。トオマと初めて会ったとき、彼女はすでに不老不死であり、長い年月を生きていた。そしていつも、眠りの海でうたっていた。

「アナが永遠にこの海にいるのなら、俺も一緒にいるよ。もしこの海から開放されたら、アナ、俺と一緒に生きよう」

何度も繰り返し約束。トオマは目覚めるたびに、同じ言葉をささやく。けれど彼女がその言葉を聞くのは、一人の命が生まれ、死ぬまでの、長い年月に一度だった。

彼女の涙は、トオマが眠っている間にこらえていたぶんを、吐き出しているような涙だった。そして涙を出してばかりと開いた心を埋めるように、トオマはささやき続けた。

「眠ってる時のこと、ほとんど覚えてないけど、アナの歌だけは覚えてるよ。アナがうたってくれたら、俺は必ず目を覚ますから」

だから、この海で、俺は眠り続けるよ。

すべての涙を出し切った後。彼女はかすかに、うなずいた。

トオマが再び眠りについたのは、それから数日後のことだった。毎日、アナと触れ合い、彼女が満足するまで抱き合った。話をした。口付けをした。必ず目覚めると何度も約束した。

手をつないで湖面を歩き、いつもの場所で、手を離す。アナの歌声がよく届く、宿に近い湖のほたり。もう一度口づけを交わして、

トオマは水の中に横たわる。

珊瑚の上に身体を乗せ、しんと静まり返った湖に、身体のすべてをゆだねる。

歌声が聞こえる。

その古の言葉は、トオマが生まれた時代よりも、さらに昔のものだ。いつぞやかアナに意味だけは教えてもらっていたけれど、長い眠りのせいか、記憶が危うくなっている。

『あなたが眠り、目覚めるまで。

私はあなたを想い、歌い続けます』

遠ざかってゆく意識の中、彼女の声が、海の中に響き渡る。音叉の響きのように、どこまでも響くその声は、眠りの浅くなった人々の心をも落つかせているようだった。

唇から、最後の息が漏れる。苦しくはない。

彼女の腕に抱かれるような、包み込まれるような安堵感。それを感じながら、トオマは意識を手放した。

声が聞こえる。

歌が聞こえる。

彼女は今日も、眠りの海でうたい続ける。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6700g/>

眠りの海でうたうひと

2010年10月8日15時56分発行